

●街並み統一して再建

日南市飢肥は典型的な地方の小規模な城下町で、古い家構えの街並みが歴史的景観を残している。飢肥の街並みが文化、観光面で見直されたのは飢肥城復元事業からであった。一九七六（昭和五十一年）年、藩校振徳堂が改修され、さらに翌年の九州初の国の重要伝統的建造物群保存地区選定で、より弾みがついた。

この中で市民や市出身者、企業からも寄付金を募り、大手門、歴史資料館、さらに松尾の丸に武家屋敷を再現して整備。その後も商家資料館、小村記念館、旧伊東伝左衛門屋敷、旧山本家などを公開した。

街並み保存では住民の協力も忘れてはならない。国道222号・本町通の拡幅工事が決まったのは七三（同四十八）年。当時、飢肥城復元事業と街並み保存計画が示され、住民たちも白壁造りの商家群の価値に気付いた。



飢肥城大手門。観光客も多く、飢肥のシンボル

結果は拡幅工事の实行で、明治から昭和初期の多くの商家が失われたが、通りは住民によって自主的に城下町にふさわしい和風の街並みに統一して再建された。旧形態を維持するため、はりを残して改築したり、建物をそのまま後方に移動した家もある。明治初期に建てられた「妹尾金物店」は移築修復され、商家資料館となった。現在、商人町で使われていたものが展示されている。

飢肥城復元から二十年以上がたち、時代の流れとともに飢肥の町を取り巻く環境も変化。後継者不足、空き家問題、観光客の滞留時間の伸び悩みなど課題にも直面している。そんな中、地域おこしは自分たちの力で、と新しい動きも出てきている。

その一つが飢肥観光の浮揚を目的に九七（平成九）年二月に誕生した町おこしグループ「楽市楽座」。会員は約三十人。職業もさまざまな二十代から五十代までが集まり、特産品を開発して月一回のフリーマーケットや野外コンサートを開催、さらなる活性化に向けて奮闘中。

昨年五月には大手門南の商店跡を利用して、常設物産館「飢肥泰平楽市館」を開設、地元企業、商店、個人が作った特産品の販売を始めた。今後、既存商店との共存協力をどう図るかが課題である。

飢肥の人気の背景は本物の歴史景観にある。二〇〇〇（同十二）年にはそうした歴史景観を広くアピールしようと、住民の観光ボランティアガイドが誕生した。それぞれが歴史を学び、創意工夫を重ねた案内で評判も高い。

長友禎治